

## 新型コロナウイルス感染症【6】

2021/12/27 (加藤良一記)

### 繰り返すパンデミック

新型コロナウイルス出現から2年が過ぎようとしています。日本では秋以降陽性者が激減していますが、原因が掴めないまま今度は新たなオミクロン株の出現です。ただし、以前のように重症化しないのは、ワクチン接種が進んでいることでもあるのではないかと推測されています。しかし、まだ分からないことばかりです。

雑誌〈現代化学〉11月号に歴史学者の磯田道史さんとウイルス学者水谷哲也さんのリモート対談が載っていました。

磯田さんは、江戸時代、春から夏にかけて感染が広がった不思議な疫病について、「インフルエンザ（流行性感冒）とは思えない風邪」と書かれているといいます。この表現について、これまで、歴史学者や感染症学者はこれをインフルエンザと捉えてきたが、コロナなどのほかのウイルス感染症も含まれていたのではないかと磯田さんは見えています。

### お い かりかぜ 御猪狩風

寛政7年(1795)旧暦3月初旬(現在の5月)、将軍家斉が千葉へ狩りに行った数日後に家来のあいだに流行が始まり、バタバタと倒れたといいます。不思議なことに、患者の衣服には必ず鹿や猪の毛が付着していました。ここから御猪狩風と呼ばれるようになりました。これは動物由来の疫病であることを匂わせるものです。ちなみに、江戸時代の風邪には「お七風」とか「お駒風」のような当時話題になって女性の名前がつけられたり、「琉球風」や「アメリカ風」と風邪がやってきた土地の名前がつけられたりしています。

江戸時代の疫病といえば、天然痘、麻疹、水痘、結核、梅毒、インフルエンザ、マラリア、ハンセン病などでした。幕末にはコレラが流行しましたが、かの渋沢栄一の妻千代さんはこの病気で亡くなったことが先日最終回を迎えたNHK大河ドラマ『晴天を衝け』のなかで演じられていました。

エドワード・ジェンナーが天然痘予防に牛痘ぎゅうとうを使用したのは、安永7年(1778)頃でした。牛痘は、ウシの皮膚疾患である痘瘡で、ヒトの天然痘ウイルスに似たウイルスによって起こります。ふつうは全身症状を起こさず、乳房に局限して数個の痘瘡とうぼうを生じます。一度牛痘にかかれば、人痘（天然痘）に対する免疫を獲得するという事実をジェンナーが天然痘予防に利用しました。その痘毒はヒトに対して毒性が弱いので、痘瘡の予防に用いられました。これがワクチンのそもそもの発祥です。以来、感染症対策としてのワクチンの役割は非常に大きなものとなり、現在に至っています。

新型コロナウイルス感染症は、中国の武漢で発生したとされているため、不名誉なことに差し詰め「武漢風」と名づけられてしまいましたが、中国はもちろんこれを嫌がっています。こちらも武漢の食材市場で売られていた動物

に由来すると見られており、動物からさまざまなウイルスが人に感染しています。

◎ **パンデミックの発生から終息まで**

パンデミックは次のような過程を経て終息するといわれています。

- ① 感染力の強い変異株が出現
- ② 大流行が発生
- ③ 感染した生存者は抗体を保有し免疫を獲得する
- ④ 終息の方向へ

現時点は、③の段階にいると思います。しかし、オミクロン株のような変異株が次々と出現してくるあいだは③から抜け出せないでしょうし、そのためには感染防御がザルにならないよう人類が英知を傾けねばなりません。

**[5]**  **[6]**

**Back**

虫めがね Top ^

**Home**

Home Page ^